

[図画工作・美術]

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の試み

－対話型鑑賞「朝鑑賞」の実践を通して－

中野 郁美*

1 はじめに

平成29年に告示された小学校学習指導要領「解説」の「第4章 指導計画の作成と内容の取り扱い」¹⁾において、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が示されている。岡田(2017)は図画工作科における「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」とはどのようなものかについて「自分の成長やよき、可能性等に気付き、次の学習につなげられるようにすること、自分との対話を大切にしつつ、互いの活動や作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり感じたことや思ったことを話したりするなどの言語活動を一層重視すること」²⁾と述べている。また、阿部(2017)は、「対話的な学びでは、子供が自ら自分の感じたことや考えたこと、意見などを話したり聞いたりするという、子供主体の基に発揮される対話」³⁾と述べており、図画工作科においても言語活動が一層重要視されている。

そこで、本研究では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」のための一方法として「対話型鑑賞」を取り入れる。対話型鑑賞とは、ニューヨーク近代美術館で始められた教育プログラム⁴⁾である。日本でも、後に教育普及プログラムの一環として各美術館で行われ、学校教育の現場等で取り入れられている。

また、カリキュラムマネジメントの視点から朝活動の時間に「朝鑑賞」⁵⁾として対話型鑑賞を行っていく。これは、武蔵野美術大学の学生有志が小中学校や高等学校で行っている教育活動(「旅するムサビ」)の中の一つである。ここでは、武蔵野美術大学の学生や芸術総合高校の生徒の作品を中学校の学級でローテーションさせながら鑑賞する手法が紹介されていた。

本研究では、児童の興味を引く作品が多く取り扱われているアート・カード⁶⁾の中から作品を選び、テレビ画面に映して鑑賞を行っていく。いくつもの作品画像を用意しておき、対話型鑑賞の始まる前に児童自身にその日鑑賞する作品を選ばせた。対話型鑑賞は1作品につき、10分～15分程度で行われるため、朝活動の短い時間で行うことができる。「朝鑑賞」としての対話型鑑賞の実践を通して、児童が主体的で対話的に作品を鑑賞する対話型鑑賞の有効性を探っていく。

2 研究の内容と方法

(1) 対話型鑑賞の概要

対話型鑑賞は、1つの作品を学級などのグループで鑑賞する鑑賞方法である。小学校低学年や初めて対話型鑑賞を経験する鑑賞者が対象の場合、作品の主題は分かりやすく、親しみのあるものがよい。しかし一方で、鑑賞者の観察、想像、感情を刺激する謎めいた部分も含まれていることが望ましい。何人でも行うことができるが、鑑賞者同士が意見を交流しやすい人数が適当である。

鑑賞の前に1分間ほど静かに、じっくりと作品を見る時間を設ける。教師はファシリテーターとなる。知識を教えたり、解説したりするのではなく、基本的に中立の立場に立ち、話し合いに参加する。活動が円滑に進むように話しやすい場を設定したり、参加者間の共通理解を促したりする。また、作品をよく見ること、観察した物事について発言すること、意見の根拠を示すこと、他の人の意見をよく聞いて考えること、話し合っただけでさまざまな解釈の可能性について考えることを鑑賞者に促していく。

ファシリテーターは、次の3つの質問⁷⁾を中心に対話型鑑賞を進めていく。1つ目の質問、「作品の中で、どんなことが起きているのでしょうか。」は、単に「何が描かれているか」ではなく、作品に内在する意味についての思考を促している。見えたことの描写にとどまらず、それが意味することや考えたことも付け加えることを促している。2つ目の

*南魚沼市立三用小学校

質問「作品のどこからそう思いましたか。」は、理論的な思考を自然に促す質問である。鑑賞者は、自分の解釈の根拠を作品に基づいて示すことが求められる。3つ目の質問、「もっと発見はありますか。」は、分かったと思っていても、もっとよく見て検討すると考えが深まったり、最初の考えが変わったりすることもあるという気づきを促すことができる。

(2) 研究対象と期間

期間：令和元年5月から月に1，2回，朝活動時に実施

対象：南魚沼市立M小学校1年生10名（男子3名，女子7名）

(3) 分析方法

本研究は，対話型鑑賞中の，児童の発言やつぶやき，行動を抽出し，発話行動記録に残す。それに分析や考察を加え，対話型鑑賞の有効性，主体的・対話的で深い学びに繋がっているかを検証する。

3 児童の実際と分析，考察

本研究では，対象を小学1年生としているため，「①作品の中で，どんな出来事が起きているのでしょうか。」は，理解しにくいと考え，「発見したものはありますか。」や，「気になるところはありますか。」と質問している。その後，作品全体の中でどのようなことが起きているか，どんな場面であるか1つ目の問いかけにつながるよう，話し合いを進めた。

対話型鑑賞が終わった後に毎回振り返りシートに①自分がその作品につけたい題名，②感想を記入した。学習に意欲はあり，自分の考えをもっているが発言することに苦手意識をもつ抽出児Aと普段から授業中つぶやいたり積極的に発言したりする抽出児Bの2名を中心に言動と振り返りシートの記入の内容や変化を追っていく。

(1) 実践1（作品：記憶の固執／サルヴァドール・ダリ）

5月13日に行った1回目の対話型鑑賞である。児童にとって身近な時計や虫，貝殻や動物のようなものが写実的に描かれている。溶けている時計，砂漠にいるアリや氷山など奇妙な光景が見る人の興味を惹く作品である。

画面に作品が映し出されるとすぐに全員が駆け寄ってじっくりと作品を見始めた。各々が思ったことをつぶやいたり，奇妙なものの発見を喜んだり，1つ1つのものが何なのかを確認し合ったりしていた。一度，全員が席につき，話し合いを始める。まずは，写真1のように，この絵の中で発見したものを出し合った。溶けている時計，木の枝，氷山，髭のようなものが生えている白い物体などだ。「どうして時計は溶けているのか？」と児童から出てきた疑問を全体に返すと，児童たちは，絵の中のものと関連付け，様々な理由を考えた。「雨雲みたいなのが見えるから，嵐が来て，雨が降って溶けてしまった。」や「砂漠の中だから暑すぎて溶けた。」などだ。髭のようなものが生えている白い物体については，白クジラ，幽霊，ラッコ，顔の一部など様々な意見が出た。

初めての対話型鑑賞ということもあり，手を挙げ発言したのは，いつも進んで手を挙げる6名であった。思ったことをどんどん口に出せる児童もいれば，何も発言せず，話を聞くだけの児童もいた。ただ，10名全員がじっくりと絵を見て各々がよく考えている様子であった。

抽出児A児は，集中して絵を見ていたが，他の児童と話したり，挙手をしたりすることはなかった。B児は進んで手を挙げ，3度発言した。活発に話し合いに参加し，頷いたり，相槌をうったりし，思ったことを何度もつぶやいていた。振り返りシートには以下のように記した。



【写真1 実践1の対話型鑑賞の様子】

A児（C3）の振り返りシートへの記入

- ① へんなえ
- ② -

B児（C5）の振り返りシートへの記入

- ① こおりのくに
- ② さばくなのに，こおりがあってふしぎだなとおもった。

(2) 実践2（作品：畑のおばけ／小川芋銭）

続いて6月6日の実践を示す。薄暗い山の中をダイコンやスイカのお化けたちがぞろぞろと歩いている様子が描かれており，空には月が浮かんでいる。絹に色彩をつけて描かれたもので，一部は水墨画のように墨で描かれたような箇所がある。野菜には，目や鼻や口が付いている。一見不気味だが，1つ1つの表情が細かく描かれており，ユーモラスな印象も与える作品である。

作品が映し出されると多くの児童が口々に思ったことを話し始めていた。1回目よりも多くの児童が思ったことをすらすらと口に出すようになってきた。今回の対話型鑑賞も児童は皆，終始集中して絵を見ていた。普段，集中して席に

座ったり、教師の方を向いて話を聞いたりすることが苦手なC4は動きを止め、作品の細かな部分まで見入っていた。始めは、絵の中に見えるものを1つ1つ挙げていくが、教師が聞かなくても、児童はそれらを関連させて、作品全体の雰囲気を感じ取って話し始めたり、短い物語を作り出したりする児童もいた。また、実践1のときよりも多くの児童が思ったことを自由につぶやいていた。さらに、それらのつぶやきに同意したり、つぶやきを聞いて新しい考えが出てきたりし、話し合いが活発になった。対話の内容が作品の場面全体や描かれている時間帯など、より深く理解しようとするようになってきている。発話行動記録25C9「朝！朝の霧。霧は朝に出るから。」、37C1「夜から朝にかけて霧が出るから。」の霧の話からも分かるように、児童は自分の生活経験と結び付け、理由もつけて作品の場面の時間帯について語っている。目に見えた情報だけでなく、見たものと自分の中にもっている情報や知識、経験と結び付けて、理由を話したり、説明したりする様子が見られた。

振り返りシートには以下のように記した。A児は今回、1分間の鑑賞タイムの間に見つけたものをいくつかつぶやいていた。自分から手を挙げ、発言することは無かったが、発話行動記録の33C3「月が出ているから。」と振り返りシートへの記入から作品に描かれているものを野菜のお化けと捉えており、夜しかお化けは出ないから夜なのではないかという考えをもっていることが分かる。たった1度の発言であるが、下記の振り返りシートにも自分の見付けたものや思いが書かれており、前回より積極的に対話型鑑賞に参加できた様子を読み取れる。B児は今回も1分間の鑑賞タイムから、思ったことを次々に話し、友達一人一人の発言をよく聞く姿勢を見せた。振り返りシートへの記入から、自分の思いを伝えることができて楽しかった、満足した様子であることが分かる。

A児（C3）の振り返りシートへの記入
 ① よるのやさいたち
 ② つき、とうがらし、なす、かぼちゃ、かぶ、やま、はたけがみえました。とてもおもしろかったです。
 きょうは、まえよりもたのしくてよかったです。

B児（C5）の振り返りシートへの記入
 ① やさいのおばけ
 ② いっぱいおはなしができてたのしかった。すてきなえだった。

(3) 実践3（作品：泣く女／パブロ・ピカソ）

続いて2週後の6月20日に行った実践を示す。鮮やかな色彩で泣いている女が描かれている作品であるが、キュビズムの技法により、顔には輪郭以外にもたくさんの線が入っている。帽子のようなものをかぶっていたり、ハンカチのようなものを口にくわえていたりし、それが他の線と一体となって新たなものにも見て取れる作品である。たくさんの線が入っているために何が描かれているのかを探ろうと、いつもよりも児童はよく「見る」ということをしていた。発話行動記録4PP（C4を見て5人が真似して逆さまから見てみる。）のように児童は逆さまから見たり、16C4「ここから見ると人の顔に見える。」（画面の少し離れた位置から見る。）のように画面から少し離れて

R元年6月6日 8：15～8：28実施
 T：中野 C1～C10：児童 PP：特定できない複数の児童

番号	話者・行動者	内容、発話記録、行動記録
1	T	「みなさん、まずはこの絵、よく見てください。」
2	PP	「あ、お月さま。」「ダイコンくし！」「これカボチャじゃない？」「これトウガラシだよ。」「ニンジンじゃない？」
3	T	「では、席に戻ってください。（席に戻る。）」
4	T	「この絵の中で発見したものを教えてください。」
5	C3	「トウガラシ。」
6	T	「トウガラシ、どこ？」
7	C3	「ここ。」（画面を指さす）
8	T	「これは、トウガラシだと思った人いますか？」（C3も入れて6人挙手）
9	T	「違うものだなと思った人もいるのね。何に見えた？」
10	C8	「ニンジン！」
11	T	「なるほどね。他に発見したのありますか？」
12	C1	「ここ（左のカボチャ）は、ライオンなんだけどさ、ここ（右側の6つの野菜）は野菜の妖怪みたいに見える。」
13	T	「全体的に言ってくれたね。ここは、野菜の妖怪だって。こっちは？」
14	PP	「ライオン！」
15	T	「どこらへんからライオンだと思った？」
16	C1	「顔！」
17	T	「じゃあ、みんな近づいて見てみて。」
18	C5	「なんか、牙が生えてる。」
19	C9	「目がこんなんなってる。（目を吊り上げる動作）」
20	T	「確かによく見ると目が吊り上がっているね。C1さん、どんなところから妖怪っぽいなって思ったの？」
21	C1	「なすは目が1つで、野菜とかは目は生えてないのに生えているから。」
22	T	「野菜って人間と同じ目なんてないもんね。他に発見したものはありますか？」
23	C6	「ここ（墨で描かれている部分を指さす）が霧みたい。」
24	T	「霧なんてよく知っているね。」
25	C9	「朝！朝の霧。霧は朝に出るから。」
26	T	「これは1日のうちのいつだと思う？」
27	PP	「夜！」
28	T	「夜っぽいなと思う人！」（6人が挙手）
29	T	「C2さん、なんで夜っぽいと思った？」
30	C2	「夜しかお化けは出ないから。」
31	PP	「ああ、確かに。」
32	T	「他に夜っぽいと思った人、わけを教えてください。」
33	C3	「月が出ているから。」
34	T	「夜に月が出るもんね。」
35	C1	「夜って、暗くなるから。」
36	T	「暗い感じがしたんだね。」
37	C1	「夜から朝にかけて霧が出るから。」
38	T	「M小の近くも朝に霧が出るときあるもんね。」

【図1 実践2の発話行動記録】



【写真2 実践2の対話型鑑賞の様子】

見たりと様々な見方を試していた。

C10は学習意欲は高いが、普段声が小さく、意見を発表するときなどは自信のない様子が見られる児童である。6 C10「ここが手みたい。」とC10が具体的に指の部分を示し発言すると、10C9「本当だ!」と反応が返って来て、他の児童も納得した様子を見せ、14PP(拍手)が自然と起こった。今までの対話型鑑賞の中で発言することが少なかったC10はこれを機会に進んで手を挙げ、積極的に自分の考えを伝えるようになった。

始めは、絵の中に何が描かれているかを話し合っていたが、最後には絵には描かれていない「なぜ女は泣いているのか。」というところの話し合いになった。それぞれの児童が絵から得た情報や想像を結び付けながら、思い思いの物語を作り、活発に対話する様子が見られた。

振り返りシートには以下のように記した。

A児(C3)の振り返りシートへの記入	
①	かお
②	みえたもの かお、おしろ、かなしむ、なく、きく、じんせいはかみひこうき、おしゃべり、こおりのじょうおう、こども、おとな、しくしく、はっくしょん
B児(C5)の振り返りシートへの記入	
①	ないているおんなのひと
②	いっぱいしたのしいことをまなんだ。これはえのぐがつかわれていることはわかるけれど、あとはなにをつかってかいたのかはわからない。

A児の振り返りシートから、最終的に女の人の顔と捉えているが、他にも様々なものに見えていることが分かる。今回の対話型鑑賞についての記述は見られなかったが、対話型鑑賞終了後にも、教師のところに来て、「ここは〇〇に見える。」や「おもしろかった。」と自分から感想や対話型鑑賞中には話さきれなかった思いを伝えに来た。積極的に対話型鑑賞に参加して自分から作品を知ろうとし、主体的に作品を鑑賞していたことが分かる。B児は今まで、「描かれているものについて」や「対話型鑑賞について」の感想を書いていたが、どんな画材を使って描かれているかについて興味をもち、感想に書いていた。様々な視点から作品について知ろうとする様子が見えてくる。

(4) 実践4 (静物-パレット, 燭台, ミノタウロスの頭部/パブロ・ピカソ)

7月4日に行った実践である。この作品もピカソが描いたものであり、色鮮やかな色彩が目立つ。ミノタウロスの頭部と思われるものが右側に、左側には、燭台、パレット、筆、開いた本のようなものが描かれている。

実践3での経験を活かし、児童は、序盤からミノタウロスの頭部を様々な角度から試し、何に見えるかについて話し合っていた。正面から見たときの人間や牛、猪だけでなく、逆さから見ると仁王立ちしている人間に見えるという考えや横から見るとジャガイモや石に見えるなどそれぞれ皆違った見方をしていた。

振り返りには以下のように記した。記入内容についてA児に聞いてみると、絵が難しく、長い間見ているといろいろなものに見えてきて分からなくなることが多

令和元年6月20日 8時16分～8時30分実施
T:中野 C1～C10:児童 PP:特定できない複数の児童

番号	話者・行動者	内容, 発話記録, 行動記録
1	T	「1分間見ましょう。」
2	PP	「目玉, 星になってるんじゃない?」「おお, 星だ。」 「気持ち悪い…。」「肌の色が違う色になってる。」
3	C4	「裏でも分かる。」(足を広げて, 下から覗く。)
4	PP	(C4を見て5人が真似して逆さまから見てみる。)
5	T	「へえ, その向きからも見えるんだ。見つけたものや, 気になったところはありませんか。」(7人が挙手)
6	C10	「ここが手みたい。」
7	T	「手のどの部分?」
8	C10	(爪を指さす)
9	T	「みんな, 爪だって。どうかな?」
10	C9	「本当だ!」
11	T	(絵を指示棒で指さす) ここって…
12	PP	「あ, ここだ!」(指の関節のところのしわと絵を見比べる)
13	T	「こっだけ注目してよく見て。そっくり!」
14	PP	(拍手)
15	T	「他にも発見したものを教えて。」
16	C4	「ここから見ると人の顔に見える。」(画面の少し離れた位置から見る。)
17	PP	「見えるー!」(7人挙手)
18	C9	「だってここに歯があるよ。」
19	T	「C4さん, どこからそう思った?詳しく教えて。」
20	C4	「ここが帽子になっていて, 海賊みたい。これは女性の髪。これが, イヤリング。こっちにもイヤリングがあるでしょ。これは…」
21	T	「見えるね!」
22	C4	「手?手!これは, マントみたいな…。で, ここは靴。」
23	T	「ありがとう。」
24	C8	「なぜか, 目の中が星になっている。あとね, ここはなんだろう…。ダイヤモンド。」(女がくわえている白いものを指さす)
25	T	「みんなにも聞いてみようかな。」
26	PP	「氷」「ほうれん草」
27	C5	「なんかこうやって歯がちっとやってる」(歯でくわえる動作)
28	C8	「ここが白い涙でさ, こうやって悔しくてうーってやってる。」(自分のハンカチを口でくわえてまねる)
29	PP	(周りの子もまねする)
30	C8	「こわいドラマを見たんじゃないかな。」
31	T	「今, 涙を流してるんじゃないかっていう話があったんだけどなんで涙を流しているのかな?」
32	C9	「誰かに怒られた。」
33	C6	「悪いことをしちゃった。」
34	C3	「これは, お母さんで, 子供が大きくなって, 子供がどこかに行っちゃったから泣いてる。」

【図2 実践3の発話行動記録】



【写真3 「泣く女」のハンカチをくわえる動作をまねる様子】

かったようである。しかし、友達の話の聞いていると「確かにそう見える。」と納得できるところがたくさんあり、いろいろなものが見える絵という意味の題名をつけた。また、そんな見方を見つけた友達をすごいと感じたと述べていた。対話型鑑賞の中で、自分の考えだけでなく、思ったことを自由に話し、対話しながら鑑賞することで得られた気付きである。また、B児の振り返りからは、理解するには難しいと感じた作品でも分かろうとする姿勢が感じられた。



【写真4 実践4の対話型鑑賞の様子】

A児の振り返りシートへの記入

- ① いろいろなえ
- ② うし、えのぐがみえました。たのしかった。みんながいっぱいおしゃべりをしていてすごいとおもいました。それに、みんなすらすらとはなしていてとてもよくわかりました。

B児の振り返りシートへの記入

- ① ぐちゃぐちゃのえ
- ② ぐちゃぐちゃのえで、なにかにはみえなかったけど、いのししにはみえた。えのぐでかいたもので、きれいだった。ちょっぴりこわかったけれど、ふしぎなえでちょっぴりおもしろい。

4 成果と課題

本研究を通して3つの成果と1つの課題が明らかになった。

1つ目の成果は、対話型鑑賞で児童が主体的に作品を鑑賞する、つまり、主体的に学ぶ姿が見られたことである。まずは、作品が映し出される場面である。その瞬間、どの実践においても教師から促されることなく児童全員が自分から作品をよく見ていた。次に、話し合いが進んでいった場面である。自分と異なる意見が出てきたときに児童はまた、自分からもう一度作品をよく見ようとする。それでも見えないときは、顔を横に傾けたり、逆さまから見たり、離れて見たりして分かろうとする。自分から作品を知ろうとし、学びに行く姿があった。「泣く女」では、なぜ女はハンカチをくわえているのかを想像しながら動作化していた。また、ムンクの「叫び」では、描かれている人を真似て叫び、どんなふうに叫んだか、なぜ叫んだのかを皆で考えた。このように、自分たちから作品の中の人物や場面の状況を理解しようとする行為が見られ、このような姿からも、主体的に学ぼうとする姿が見てとれる。



【写真5 逆さまから見ようとする様子】

2つ目の成果は、阿部(2017)が述べていた、「子供が自ら自分の感じたことや考えたこと、意見などを話したり聞いたりするという、子供主体の基に発揮される対話」が見られた点である。B児に何度も見られたように、児童は友達のを聞きながら聞いたり、反応したりと友達の意見をよく聞いていた。そして、友達の意見を基に自分自身で新たな考えをもち、さらに対話が活発になっていく場面が多く見られた。それは、ファシリテーターとして話し合いに参加して感じたことでもあった。始めは、何が描かれているかについての話し合いが、少しずつ作品全体の場面や雰囲気、さらには描かれていない出来事や感情的な部分にまで話し合いが及んでいた。話し合いが進んでいくにつれ、今まで出てきた絵の解釈を基に、自分の考えを述べたり、理由をつけたりしながら対話している様子が感じられた。これは、ただ自分の意見を伝えるだけでなく、話すこと、聞くことを通して考え、話し合いが活発に進んでいたことの成果と言える。また、自分自身が見て、想像したことに自分の生活経験を結び付けて予想したり(実践2で、霧は夜から朝にかけて出るという経験をもとに描かれている場面は朝方なのではないかと予想すること)、推測したりしたことは、高次の学びであると捉え、深い学びと言えるのではないだろうか。対話すること、主体的に学ぶことが同時に行われることで、作品への深い理解、つまり深い学びに繋がったと考える。

3つ目の成果は、発言することに自信がついたことや、友達の意見を大切にすることが多く見られたことである。進んで手を挙げ自分の意見を伝えることができる児童ばかりではない。どの学級でも間違ったらどうしようと思い、発言することをためらう児童はいるだろう。芸術作品は、様々な見方ができる。見方は人それぞれである。自分だけで見ていたらAにしか見えないものも、友達の見方を聞くとBやCに見えることも多い。そんな新たな見方の発見が対話型鑑賞の中で



【写真6 ムンクの「叫び」を真似る様子】

何度も起こり、共有されていた。C10は自分の見方の発見にみんなから拍手をもらい、笑顔を見せた。その後、対話型鑑賞だけでなく、他の授業でも進んで手を挙げ発言している。自分の思ったことを話すことで自分を受け入れてもらう、自己肯定感につながったと考える。また、B児は、「いろいろなはなしができてたのしかった。」という感想をもっていた。話すことで満足感、充実感を得ている様子が分かる。B児は、友達の意見をよく聞き、反応し、自分の意見も進んで伝えることのできる児童である。また、A児は実践4の中で友達のよさを見付けている。友達から認められる経験を繰り返し積むことで、「考えたことを表現することは楽しい。」「また発表してみたい。」と次の表現することへの意欲を高めることができたと考える。どんな意見も受け入れてもらえる温かい雰囲気の中で鑑賞するからこそ、新しい考えが生まれ、共有され、鑑賞が深まっていく。学級経営の面から捉えても、対話型鑑賞は有効な特性が多くある。

課題として、他の教科でも対話型鑑賞の手法を生かし、主体的・対話的に学ぶ場を作っていきたいと考えている。今回は、対話型鑑賞によって児童自らが作品を知ろうとする主体的な学び、対話することで、より作品を深く知ろうとする学びの姿が成果として見られた。これは、作品を鑑賞するという設定によって教師主導ではなく、児童が主体的に作品とかわり、対話的な学びが行われていたとも考えられる。ここから、児童の学びたい、知りたい意欲を引き出す導入や発問がいかに重要であるかが分かる。他教科における学びでも、児童が主体的に思考できる場づくりが必要である。また、考えたことやイメージしたことを共有しながら学級全体で追及していく学びのかたちは、答えを知っていればよい学習ではなく、その過程を重要視する学びと似ている。様々な見方や考え方に触れる学習形態の工夫を図っていくことも今後一層重要である。

5 おわりに

1・2上の教科書³⁾に、破いた紙の形から思いついたことを表す題材がある。対話型鑑賞前の5月に行った際、破いた紙から何かの形に見立てるということが難しい児童が多く、手が動かさず考え込む様子が見られた。友達のまねや教師がつくったものと同じ形の紙を探し、同じようにつくる児童もいた。対話型鑑賞を始めて、7月にもう一度同じ題材を行った。そこでは、対話型鑑賞時のように「これは〇〇に見える。」や「逆さまにすると〇〇だ。」と思ったことを自由に話しながら制作が進んでいった。対話することでストーリーも生まれ、発想も広がり最終的にみんなですべて1枚の大きな紙に作品を貼り合わせようということになったのである。

学校教育の中で、対話型鑑賞を取り入れるときに、図画工作科の時間に行うことができる。しかし、45分間の授業の中で15分程度の時間を対話型鑑賞としたときに、残りの時間の使い方が難しいと感じていた。そこで「朝鑑賞」を取り入れた。集中して見ること、話すこと、聞くことが約15分間の中に集約された対話型鑑賞を行うことで、脳が活性化され、他の学習へよい影響をもたらしたとも感じている。本学級の児童は、対話型鑑賞に意欲的であり、一日の始まりに積極的に取り組める活動を設定することで、意欲をもって1日の学習に臨むことができた。また、学級経営上、友達の意見にしっかりと耳を傾ける、自信をもって自分の考えを学級全体の場で話すことができるという点でも対話型鑑賞の有効性を感じた。対話型鑑賞スタイルの朝活動・朝鑑賞であれば、美術に関する特化した知識がなくとも実施可能であり、カリキュラムマネジメントの面でも容易に実施可能なので、他の学年や学校に普及していきたいと考えている。そのためにも、引き続き、対話型鑑賞を続けていく。

【引用参考文献・註】

- 1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編」, 日本文教出版, p.104
- 2) 阿部宏行, 『平成29年度版 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 図画工作』, 株式会社 東洋館出版社, 2017年, p.10 阿部と岡田の対話中の岡田の発言
- 3) 同上書²⁾ p.10 阿部と岡田の対話中の阿部の発言
- 4) フィリップ・ヤノウィン, 京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳 『学力をのばす美術鑑賞』, 淡交社, 2015年, p.11
- 5) 三澤一実, 『「朝鑑賞」の取り組みと成果報告』, 日本美術教育研究論集/日本教育美術連合 第51号, 2018年, pp.287-293
- 6) 日本児童美術研究会, 図画工作 アート・カード, 日本文教出版株式会社, 2015年
- 7) 同上書⁴⁾ p.43
- 8) 日本児童美術研究会, 『ずがこうさく1・2上』, 日本文教出版株式会社, 2015年, pp.24-25